4/17毎日

感染 恐れる毎日

クラスター発生 介護施設職員の苦悩

自宅待機の人的余裕なし

高齢者施設での新型コロナウイルス感染症のクラスターが相次ぎ発生しています。昨年、クラスターが発生した首都圏の介護老人保健施設（老健）で働く30代の職員は「施設でクラスターが発生して、濃厚接触者になっても自宅待機する人員の余裕もなく、感染や発症の恐れを感じながらの毎日でした」と振り返ります。

この老健でクラスターが発生したのは、昨年秋。職員1人の陽性が確認されましたが、保健所は当初、この職員との濃厚接触者のみ待機と検査の対応でした。ところが、入所者に発熱者が相次いだことから、保健所は全入所者と全職員のPCR検査を実施。

その結果、陽性者が5人を超え、クラスターと認定されました。

陽性の入所者は入院し、軽症の職員は自宅待機に。2週間たち、収束したと思ったときに、再び陽性者が出て、一気に広がり20人を超えました。

休日呼び出しも

施設には、いわれなき中傷の電話もありました。「施設のそばを散歩していたが、コースを変えた」「入所者を外に出すな」

「最初の緊急事態宣言の前から、共用部の消毒や手洗い、手指消毒の徹底をしてきましたが、それでも防げませんでした。認知症の方も多く、マスクを外されることがあります。一人ひとりに職員がつくこともできないので介護施設特有の困難もありました」といいます。

陽性の入所者に、食事や排せつの介助で直接接していた職員は濃厚接触者となりましたが、自宅待機にする人的余裕がなく、PCR検査を受けただけでした。

この職員は陰性で、入院した入所者に重症化した人はでませんでした。

今は、落ち着きを取り戻してきましたが、再び全国的に感染が広がり、2度目の緊急事態宣言が延長される中、緊張状態は続きます。

「体調不良の職員は休むことにしているので、休みの日でも呼び出しがかかります。だから、お酒は飲みません。昨年2月ごろから旅行にも行っていません」

定期検査が必要

この職員は、1度目の緊急事態宣言のとき、自宅の近くにウイークリーマンションを借りました。

「がん治療で退院したばかりの母親に感染させてはいけないので、別居しました。ひとり10万円の特別定額給付金を充てましたが、赤字で持ち出しになりました」

宣言解除後、自宅に戻りましたが、昨年秋の施設のクラスター発生時には、母親と高齢の父親を自宅の3階に「避難」させ、自分は2階で暮らし、別居生活を再開させました。

「両親とは、階が違うだけですが、直接会うことはリスクがあり、会話は電話です。お正月は、2階と3階でネットを使い、『家庭内リモート新年会』をしました」

介護施設の職員は、自分が感染し入所者にうつしてはいけない、施設で感染し家族にうつしてはいけない、家族から感染してもいけない、そのいたばさみのなか、笑顔を絶やさず働いています。

クラスター発生時には検査をしましたが、今は定期検査はありません。せきや発熱の症状で、家族ぐるみで自費検査をする職員もいました。パート職員でやめた人も。

「どこの介護施設の職員も同じような困難をかかえながら、人手不足のなか働いています。感染してからでは、感染拡大を抑制するのは難しい。介護施設では、週1回程度の定期検査を行政の責任で実施することが必要です。無症状者を含め、早期に陽性者を発見し、保護・隔離しないと、介護施設のクラスターは防げません」

職員の自宅玄関には、手指消毒器、ドアノブなどの消毒スプレーが常備され、手すりには接触感染対策テープがまかれています